

小林さんの思い出

小林さんには、よくお酒に誘っていただいて、いろいろと話しをしました。お酒を飲みながら小林さんは身の上話をされることがありました。小林さんの生まれた家は豆腐屋で、小さい頃から親に言われて、一人、車を引いて、ラッパを鳴らし、豆腐を町に売りに行っていたそうです。まだ、小学生だった小林さんは、恥ずかしかったけど、仕方なくやっていたと言われていました。

大学は立命館のほうに入りましたが、その入学の最初のエピソードも小林さんらしいと思いました。はじめてのクラスの顔合わせで、一人一人が、自己紹介を皆の前で話すのですが、小林さんの順番が来るまで、皆、同じように行きたかった大学に落ちて、この大学に来たと話していたのですが、小林さんは、自分はこの大学で学びたいことがあって入ったと言ったそうです。人はどうであれ、それに合わせず、自分が思ったことを正直に言う小林さんらしい話だと思いました。

小林さんは、専門は国文学でしたが、自分の専門分野を超えて、いろいろな分野のことに関心を持たれていました。大学の頃、図書館で一人、マルクスの『経済学哲学草稿』を読んでいたと言われていました。初期マルクスの疎外論として有名な本ですが、この本を時々読み返されていたようです。専門的なことはわからないが、何かひきつけるものがあったのでしょうか。時々、自分の専門外の本を読むことになっていると言われていました。

早野 禎 二

ある時、私が、社会学者のゴッフマンの『儀礼としての相互行為』という本を持っていると、その本はどんなことが書いてあるのかと聞かれたこともありました。私も、専門以外の本を広く読むのが好きなので、小林さんと分野を超えて本や著者の話ができたことがとてもよかったです。

小林さんと話して印象に残っているのは、小説家の高橋和巳、夏目漱石、歴史学者の石母田正と国文学者の西郷信綱、経済学者の内田義彦について話したことです。高橋和巳については、彼の文学の「憂鬱」は、中国文学や歴史に流れる「憂国」の思想の影響があるのではないかと話したことがあります。また、小林さんは若いころ石母田正と西郷信綱のような研究者になりたいと思っていたそうです。そのような夢はもうあきらめたが、石母田正の本はいつも枕元に置いてあると言われていました。

私が西郷信綱の文章は、外に向かって自分の主張をアピールする文体ではなく、飾り毛がなく、読む人がその文章の中に自然に入っていけるような落ち着きを感じることができると話すと、それは正しいと言われ、小林さんも、西郷信綱は読むと元気が出て、学問をしようという気持ちかわいてくると言われていました。小林さんからいくつか西郷信綱の本を紹介してもらいましたが、特に『国学の批判』という著作に強い関心を持たれていたようです。また、中国文学の研究者で

は誰がよいですか、吉川幸次郎ですかと聞いたたら、白川静のほうがよいと教えてもらい、いくつか本を紹介してもらったこともありました。

小林さんは夏目漱石もお好きで、二人で夏目漱石について話したこともありました。『吾輩は猫である』の最後は、猫が水に溺れて死んでいくところで終わっていますが、それは生きる苦しみから解放のようには読めるという話を私がいしたら、小林さんは、漱石は生きることが苦しかったと思う、しかし、その苦しい生を最後まで生きたところが漱石の偉いところだと言われていたことが印象に残っています。

小林さんは内田義彦もよく読まれていました。内田氏は、言語というものは、その社会の文化や歴史と深くかかわっているもので人々の日常生活と言葉は結びついているものであると論じた人です。言葉を深く理解していくことは学問にとって基礎であり、これは、単に文学や言語学だけではなく、私の専門領域である社会科学の分野にもそして自然科学の分野にも当てはまることだというのが内田氏の主張です。

小林さんと内田義彦について話していく中で、言葉と社会、学問の関係についてより深く考えるようになりました。日本語は日本の社会、伝統、歴史、制度に深く結びついているのであり、社会や歴史、制度を扱う社会学者も、古典文学、近代文学をもっと勉強しなければならぬと考えるようになりました。日本語や日本文学の教養を深く身につけることが、日本のオリジナルな社会学や社会科学を生んでいくのではないかと今は考えています。小林さんと話していく中で、このことに気づきましたが、自分の古典文学の教養の少なさを今からも取り戻すには、残念ながら年齢的に時間が足りないと思っています。小林さんは、中世の庶民や遊女の研究をされていたようですが、京都の大学時代、部落差別や在日朝鮮人差別の問題にもかかわっておられたと話を聞いたことがあります。小林さんはゼミの授業で、野村進著『コリアン世界の旅』という在日朝鮮人の近現代の歴史と差別を扱ったノンフィクションを使われていたようですが、学生の関心はいま一

小林さんの思い出

つだと嘆かれています。小林さんは、虐げられながらも哀しみや喜びに生きる庶民に光をあてた研究をされていたのではないかと思います。それはご自身が庶民として、悲しみや喜びを経験されてきたからではないかと私は思っています。

小林さんが話されたことの中でもこれは最後の方だったと思います。小林さんは、自分は、これから「歌」を研究していきたいと言われました。それも、書かれたものを読む「歌」ではなく、声を出して歌われる「歌」を研究したいと言われました。この話は何度かされていたので印象に残っています。しかし、その「歌」の研究は、結局はできませんでした。

二人が最後に原駅近くの飲み屋で酒を飲んだのは、25年の秋ぐらいだったと思います。これが小林さんとゆっくり話した最後でした。その時した話がいまでも心に残っています。それは人間と「言葉」についての話でした。私は、人間は「言葉」によって、確かに、いろいろなことを考えるができ、それは動物にはできないことだけど、しかし、また「言葉」によって人は傷つけられたり、不公正な目に合わされるのではないかと。それよりも、「言葉」を知らない鳥や魚や動物の方がかえって嘘がなく、その自然のままの生き方の方が美しいのではないかと言いました。小林さんは、それに対して自分はそうは思わない、人間と動物の違いは「言葉」を持っていることだ。「言葉」があるから、こうして早野さんと話をして分かり合えるのだからと言われました。

小林さんは、「言葉」を信じていたのだと思います。そして人を信じていたのだと思います。小林さんにとって「言葉」とは、人への信頼を意味していたのではないのでしょうか。小林さんは哲学が好きでしたが、ヒューマニズムを強調されたことがありました。孔子の「仁」をヒューマニズムと言われたこともありました。小林さんと長く話してきて、小林さんにとって大切なものは、人への誠実、信頼であり、

小林さんの思い出

それはヒューマニズムとしての「言葉」につながっていくものと考え
ておられたのではないかと思うようになりました。それが、小林さん
の「言葉」の研究、文学の研究の源にあるように思いました。

そしてそれは小林さんの生き方そのものであったように思います。

小林さんがその最後の晩、私に語ってくれた人間と「言葉」の話から、
小林さんは人への信頼と誠実さを大切なものとして生きてこられたの
だと思いました。そして、そのように思って人生を最後まで生きられ
たことは幸せなことではなかったかと亡くなられてから私は思うよう
になりました。

小林さんには、研究の話に限らず、いろいろな話を聞いてもらいま
した。小林さんは忙しい時にもよく私の話に耳を傾けて聴いてくれま
した。しかし、これも大学におられた最後のほうのことだったと思い
ますが、小林さんの研究室を訪ね、最近、大学の仕事が忙しくて、ゆっ
くりと大学で人と話す時間がないと話したら、自分もそうだとわれ
ていました。以前はもっと、先生同士いろいろと話していたように思
いますが、大学も様変わりし、業務が忙しくなって、そのような余裕
もなくなっていることは確かです。

この話をしたのと前後したころだったと思いますが、研究室で、小林
さんが、話のなかで、突然、宙に向かって、「生きにくい時代やなあ」
と叫ばれ、それから一人つぶやくように「こんな生きにくい時代、今
まであったのだろうか」と言われたことが今でも強く印象に残って
います。小林さんに限らず「生きにくい時代」を今、人々は生きている
のではないのでしょうか。

しかし、小林さんは京都に戻られて、病気の静養をされながら本を
三冊出され、研究会でも発表されました。家族に囲まれて、自分のや
りたいことをして過ごされたようです。おそらくそこには穏やかな時
間が流れていたと思います。小林さんは亡くなる前の日まで、リハビ
リで病院の廊下を歩き、こんな人は初めてだと看護婦さんから拍手を

もらったと聞きました。亡くなられたことは悲しいですが、最後は幸
せな時間を過ごされていたようで、よかったですと思っています。

今は、小林さんが残された本が手元にあります。それを、あの頃、
こんなところに行かれていたのか、このように考えていたのかと思っ
て読んでいます。読んでいると小林さんが生きて語りかけてくるよう
な気がします。これからも折りに触れて本を読みながら、小林さんと
話の続きをしているような気持ちになれるのではと期待しています。時
間がたつにつれ、小林さんの語りかけもその時々で、違った風に聞こ
えてくるのではないかと思っています。

小林さんにはいろいろと苦勞があったと思います。学部長の仕事も、
いろいろと苦勞されたのだと思います。よく勤められましたね、お疲
れさまと言いたいです。

最後に、小林さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。
ゆっくりとお休みください。